

二〇二三年度 田園調布学園大学

全学部全学科専攻 共通

国語 入学試験問題

一般選抜（個別試験型） A日程

| 受験番号 | | | | |
|------|--|--|--|--|
| | | | | |

（注意）

- 一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
- 二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
- 三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
- 四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
- 五、試験時間は六〇分です。

| 氏名 |
|----|
| |

(一) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

考えてみると①登山というのはずいぶん奇妙な行為である。重い荷物を担ぎ、重力に逆らって歩むきつい作業だし、痩せ尾根を越える際や岩壁でのロック・クライミング、あるいはヒマラヤなどでの高所登山のように、登る場所によってはたいへんな危険を伴う。事故のほか天候の急変や急病もあり、ときにはそれが原因となって死に至ることさえある。しかも猟師や釣り師などを除けば、それによって直接得られる収穫物は何もない。エネルギー収支の点では明らかに大幅なマイナスである。強いて得られるものを挙げても名誉か自己満足だけであるから、登山に無関心な人からみれば、登山者というのはなんだかわけのわからないことに熱中している、不思議な連中にかみえないに違いない。

一九五八(昭和三三)年に京都大学チヨゴリザ遠征隊の隊長を務めたフランス文学者の桑原武夫は一九〇四(明治三七)年の生まれだが、彼くらいの年代の人でも、若い頃(おそらく一九二〇年代から三〇年代にかけてであろう)は山へ入るたびに、薬草採りか鉱山かと聞かれたという『登山の文化史』(一九五三)。鉱山というのは、本来の意味の山師、つまり鉱石のありかを探して歩く人のことをさしているが、こうした類の人々を除けば、山に入る人はまだほとんどいなかっただのである。当時山登りといえば、まだ富士山や御嶽、白山、立山などへの信仰登山に限られており、日本アルプスや八ヶ岳、奥秩父などに登る人は皆無に近かった。日本アルプスの山々など、名前すらはつきりしない部分があるほどで、地元の人たちにとってはただ冬季に嵐と雪を吹きつけてくる**厄介なもの**にすぎなかった。どの家もこの大山脈に対しては背を向け、冬が過ぎるのをひたすら待っていたのである。②日本アルプスの美しさなどというものは、少なくとも地元の人たちには認識されていなかったといえる。

③再び吉江孤雁に戻ろう。彼はこう書いている。「私は日本アルプス連峰の中の、穂高岳のみ、いつも眺めている土地に生まれて、幼年から、この山を仰ぎ見ない日とはなかったのである」。それなのに、何という名の山なのか誰一人知っている人がない。学校の先生に訊ねたら「名なんて無えぞら」といって、何も教えてくれなかった。その癖、学校では、信濃全国の地図を黒板に掲げて、山や河の名を教えていたのである。彼は眼前に見る大きな、とても A 山が、無名であるという寂しさを味わった。「ついこの頃までも、私はその幼年時から眺めていた美しい山と、著名な穂高岳とが、同じものであるということに気づかずにいた」。

当時の人々が日本アルプスにいかに関心をもっていなかったかが、よくわかる。

日本アルプスを世界に紹介したイギリス人牧師ウォルター・ウエストン(一八六一～一九〇四)も著書『日本アルプスの登山と探検』(二八九六)の中で、銀を探しに来たのか、そうでないのならば水晶かなどと人々に聞かれ、ただ単に B から登るのだということを理解させるのに苦労したと書いている。これは桑原が尋ねられたのとまったく同じである。登山の習慣のない民族や国民、あるいは登山の体験のまったくくない人に、なぜ山に登るのかを説明するのはなかなか難しい。海を見たことのない人に海の説明をする、あるいは雪を見たことのない人に雪の説明をするのと同じような難しさがある。

登山とは文化的な行為であり、近代西欧型の発想を身につけた文明人のみが行なう作業である、と桑原は指摘している。原始人は通常、よほどの例外を除いて、けっして C 山の頂きに登ったりはしない。登山史を④ひもとけばすぐわかるように、近代的な登山の始まりは、近代の自然科学の開始とほぼ時期を同じくしている。登山は明らかに探検や研究に通じるような面をも

っているのである。「君はなぜエヴェレストに登るのか」と問われて「 D 「と答えたイギリスの登山家マロリー（一八八六〜一九二四）のエピソードは知らぬ者のないほど有名だが、この答えは近代登山の考え方をc タンテキかつ簡潔に表わしているといつてよい。

近代的な登山や探検・冒険と自然科学の間には共通の基盤がある。それは旺盛な好奇心である。好奇心の旺盛な人間は、不思議なことをおもしろがり、単なる実用の域をはるかに越えて物事を知ろうとしたり、⑤「一文の得」にもならないことを一生懸命に調べたりする。あるいは奇妙なものを発明したり、未知の領域を求めてどんどん突き進んでいったりもする。これはまさに科学者の精神であり、登山家や探検家の態度でもある。

このような態度や考え方は、現在でこそ当然のことのように考えられているが、歴史的にみると、あたりまえでない時代のほうがはるかに長かった。好奇心の素直なd ハツロが許されない時代が長く続いたのである。考えてみればすぐにわかることだが、民衆の好奇心を野放しにすれば、その中から必ず、いろいろな不思議なことに興味や関心をもったり、疑問を感じて何かを調べたりするような変わり者が出てくる。このことは、すでにある政治体制を維持したい権力者にとつてけっして好ましいものではない。民衆が賢くなれば、不平等に対する疑問や特権階級の支配に対する疑念が生じ、ひいてはそれが政権の基盤を危うくすることにつながってしまうからである。このため、文明の歴史のほとんどの時代を通じて、民衆は好奇心をもたないようずっと抑圧されてきたし、それからはずれるとしばしばe シヨバツされてきた。

中世のヨーロッパや、⑥「由らしむべし、知らしむべからず」を統治の基本としていた江戸時代の日本などは、その代表的なものといえよう。

いずれにしても、近代的な登山や探検・冒険などは、 E を発揮することがそのまま許される、ごく最近の時代になって初めて生まれてくるのである。

（小泉武栄『登山の誕生』より）

問一 二重傍線部 a ～ e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部④「ひもとけば」、⑤「一文の得」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 本や資料を調べれば
- イ 時間をさかのぼってみれば
- ウ 言葉を繰り返せば
- ④ひもとけば
- エ 長い経緯を眺めれば
- オ 閉じた本を開封すれば

長野県松本に生まれ、塩尻で育った詩人、吉江喬松（孤雁）のことばから話を始めたい。一八八〇（明治一三）年生まれの吉江は、生前早稲田大学教授を務め、かつてはフランス文学の紹介者として、また紀行文家として著名な人物であった。

十八世紀末までは、山岳といえばむしろ恐ろしい場所であり、悪魔の棲家であり、足をふみ入れるべき所ではないかのよう思われていた。「グリンデルワルドといえれば今日では、アルプス山中の最も感じのよい、空の美しい、空気の清い、そして明るい、朗かな谷間であるにもかかわらず、一七六〇年にグリンネルという人の記述によれば、まったく地獄のような永久の闇の立ちこめている谷間で、寒さは身を切るばかり、そして底知れぬ水溜まりのある、恐ろしい食肉鳥の飛んでいる場所とされ、そこへ足を入れたら最後、二度と出てこられない谷間と見られ、すなわちヨーロッパ大陸のなかで、最も恐ろしい、気味の悪い場所のひとつにせられている。」（『アルプの麓』一九五九）

吉江は先の著書の中で、日本人にとっての山を次のように書いている。

日本人にとっては、山頂を眺めるに一種崇拜の情なしではいられなかった。日本人にとっては、山岳は悪魔の棲家ではなくして、むしろ聖地であり、霊地であった。悪魔を恐るるのではなく、神仏の霊地を汚すことに気遣った。

ア 山に入ることを恐れたのは日本もヨーロッパも同じだが、日本人が霊地として崇めているために山に足を踏み入れることを気遣ったのは異なり、ヨーロッパ人は暗闇や厳しい寒さなど危険なイメージが伴うため山に入ることが忌避された歴史がある。

イ ヨーロッパではどんな山にも名前が付けられ、その恐ろしさの歴史から、近年での朗らかな谷の様子まで広範に山の魅力を教えるのは異なり、日本では、穂高山の地元の学校の先生ですら山の名前を知らず、山の教育がほとんど行われないため無関心になる。

ウ かつては悪魔の棲処として恐れられたグリンデルワルドも、今では風光明媚なもつとも好まれる場所として人々から愛されているが、日本では峻しい山が多く山頂を仰ぎ見る習慣が今でもあるように、容易に人を寄せ付けない厳しさがある。

エ ヨーロッパではグリンネルによって底なしの水溜まりや食肉鳥のいる恐ろしい場所として山が描かれ、日本ではフランス文学者であり紀行文作家でもある吉江孤雁によって聖地としての山が描かれるというように、文学を通して山への美意識が培われていく。

オ ヨーロッパアルプスは二〇〇年前には人を寄せ付けない恐ろしい場所から次第に人々を受け入れる好ましい場所に変化をしたが、日本アルプスは昔から霊峰として人々の崇拜を受け、薬草などを採る人も受け入れる場として疎外よりも親しみをもたれていた。

問十 本文の内容についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登山の習慣がなかった日本では、山に名前が付けられることはなかったが、西洋から登山の習慣が伝わると同時に、無名の山にも徐々に名前が付けられていった。

イ 現代は多くの人が楽しむようになった登山だが、江戸時代には政府から許可を得たもの以外の、単に個人の興味を満足させるための登山は禁止されていた。

ウ 登山という行為は奇妙だし、登山者は不思議な連中だが、自然科学の発展とともに不可解さや不思議さを探求し解明することで、近代登山の誕生が導かれた。

エ 山は古くからその土地に住むものにとって崇拜や採集など文化的な要素を育む場だったが、近代科学とヨーロッパ文化の流入によって楽しむ場所に変容した。

オ なぜ山に登るのか明確な理由を説明することは難しいが、登山者は単なる実用の域を越えて興味関心を満足させようとする近年の科学者の精神と同じ基盤をもっている。

(二) 次の文章は、五木寛之の文章「あわて者の末期の目」の全文である。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昨年から今年にかけて、面白い本が次々と出た。形而下けいじしか的な意味で本が好きな私にとっては、有難い季節だったと思う。

ロープシン(注1)の〈蒼ざめた馬〉の翻訳が、二つの出版社からほぼ同時に刊行されたのも、最近である。

——今ぞよみがえる幻の名著！

と、版元の広告コピーにも迫力があつた。書評紙からの注文で、短い文章を書くために両方を通読したが、①こなれた良い訳で a カンシンした。

ソ連文学関係では、かつての肅清作家たち(注2)の作品が A に紹介されたのが目立った傾向だった。お蔭で、バーベリヤやヤセンスキイなど、これまでのソ連では②タブーとされていた幻の作家の作品にも、お目にかかる事ができた。

雑誌に載った時から注目していた松永伍一ごいち氏の〈莊嚴なる詩祭——影の詩史のニンフたち——〉も、また幻の詩人たちの復権の書といえるだろう。私はこの本で、はじめて九州の影の詩人たち、藤田文江、滯上毛銭ふちがみもうせんなどという人々の名前を知った。

私は元来、非常な怠け者で、最近はことにその傾向がひどい。足もとに六百ワットの電気ストープを置き、コールドのズボンにナイロンの厚いヤッケという完全武装で原稿用紙に向うのだが、仲々すぐに仕事が始まらないのである。

一字も書いていない原稿用紙の前に、鉛筆を二、三十本もけずってみたり、手足の爪を全部切ってみたり、最近急に増えて来た白髪を数えたり、鼻毛を抜いて猫の鼻に植えてみたりして貴重な時間を浪費し、ようやく原稿に取りかかる頃には殆ど精力を使い果してしまっている始末だ。

そんな時には、書くのを一時中止して、読む側に回る事になっている。他人の書いた本を目の前において、締切りを気にしながら拾い読みをする。そんな時、読書は一種の快樂となる。

締切りは数時間後に迫っている。小松空港から航空貨物でフレンドシップ機に乗せるためには、一時間前にタクシーに托さねばならない。そんな時に、仕事と全く関係のない本を読み出すというのは、一体いかなる心理のメカニズムであろうか。

残された時間は、後わずか三時間。編集者の厳しい顔が目にかぶ。活字を追う視線は、すでに B な切迫感に満ち満ちている。これこそ〈末期の目〉というものである。目前の活字は生きものの如く起ち上り、文章は岩清水のように脳味噌にしみ渡る。

③これが私の読書のスタイルである。困ったものだが仕方がない。私はこれまでに、こうして何冊かの C な本とめぐり合った。人々はそれぞれの個性にもとづく読書法があるものである。

私はまだ死を決してどこかへおもむいた経験がないので判わからない。だが、それらしき緊迫した状況の中で事物を見た記憶はある。

私たちが敗戦後の北鮮から、ソ連軍のトラックを買収して三十八度線(注3)へ脱出をはかった夜がそうだった。日本人難民を乗せた大型トラックは、深夜の街道を、平壤(注4)から開城(注5)の方

角へ轟々と唸りながら突っ走っていた。途中の検問所の前まで来ると、さも停止するかのよう
にスピードを落とし、ぐるぐる回される懐中電灯の信号の直前で、突然、エンジンを全開してダッ
シユするのである。背後で自動小銃の発射音が響き、車体をかすめる弾丸がオレンジ色の火花を
散らした。

検問所は何カ所もある。次のチェック・ポイントにさしかかるまでの行程は、エンジン音と車
体の風を切る音だけが単調に続く。タイヤを射ち抜かれれば、それまでだった。保安隊に捕えら
れた脱出者たちを待っている運命が何かを、私たちは知っていた。

車の両側を、黒いポプラ並木の影が飛び去って行く。空は青黒く、サエ、満天の星は金属質に
輝きわたっている。

後続車のヘッドライトと、押し殺した幼児の泣き声。

それらの全ては、その時の私にとって、ひどく D なみずみずしさに満ちていたように思う。
そこには、一種の爽やかな、硬い存在の感覚があった。私はその時、内ポケットに刃物を隠した
十五歳の少年だった。

二十代の終り頃の事だろうか。私は新宿駅の近くを歩いていて、異常な音響を頭上に聞いた。
その瞬間、私は三メートルあたり横っ飛びに飛んで地上に伏せていた。その私の数十センチ横に、
巨大な鉄骨が地面深く突き立ったのだった。

それは建設中のビルの九階から落下した、七、八メートルはあろうという巨大な鉄骨で、アス
ファルトの道路を、まるで柔らかいパンの表面でもあるかのように突き刺しているのである。

私は起き上って、急ぎ足でその場を離れた。あの瞬間、無意識のうちに飛び離れたのは、私た
ち④戦時中に少年期を過した人間の習性だろう。

「今日、あぶなく死にそこねたぜ」

などと会社に出て喋っているうちは何ともなかったが、その日、家へ帰って寢床の中へ入って
しばらく後に、不意に震えが来た。⑤死に直面することの恐怖とはそんなものかも知れない。翌
日、私はわずかばかり残っていたボーナスの貯金を全額おろして、一夜のうちに消費してしまっ
た。人間、いつ死ぬかわからないと思うと、一銭でも残して死ぬのが惜しくなったためである。
その発想は、永く私の生活を支配して、 E な生活設計を不可能にした。

「人間、いつ死ぬか判ったもんじゃない」

そう呟くと、不意に周囲の風景の遠近法がぐにやぐにやと歪んでしまうのだった。

私はかつて池上線の沿線に住んでいた事がある。いつも電車で都心に通っていた。

その電車のパンタグラフ(注)が突然火を噴いた事があった。当然、車内は大混乱におちいった。

だが誰も悲鳴をあげて逃げまどうばかりで、非常ドアさえ開けようとししないのだ。私は靴の踵で

窓ガラスを叩き破るや、ひらりと車外に身を投じ、線路の上に飛び降りた。その瞬間、左足に

d 鈍いショックを感じたが、ともかく、脱出に成功して車中の乗客に「早く出る！」と呼びかけ
た。だが、窓ガラスの破片の中から飛び出してくる乗客は一人もいず、ただ悲鳴をあげて煙の中

を走り回るばかりだった。

その事故は、幸い大事にいたらずにeシユウシユウされた。やがて車掌がドアのコックを開け、乗客たちは、青ざめた顔でぞろぞろ降りて来た。

私は痛む足を引きずりながら、或る種の得意さを押える事が出来なかった。危機に際しての動物的な防御本能は、⑥死線をくぐった少年の感覚が未だに体内に流れている事を示しているように思えたからである。もし、送電が停止されず、車内が火の海となったならば、私以外の乗客は全員焼死したかも知れなかった。私は左足をくじいただけだった。

翌日の新聞を、私は目を輝かせて開いた。私の F な行動について、なぜか当然、新聞が賞讃の記事を書くにちがいないような気がしていたからである。

池上線の事故の記事は、社会面の左隅に小さい見出しで出ていた。

「あわてた乗客 飛び降りてケガ」

と、いうのがその見出しの文句だった。あわてた乗客とは、私の事だった。

それ以来、⑦私は主観と客観の落差について常にペシミスティックな判断をくだすようになってた。自分だけいい気になっていても、世の中というものは、どんな事を言い出すかわからない。何らかの行動に移ろうとする時に私の頭によみがえって来るのは、いつもその非情なフレイズだった。

「あわてた乗客 飛び降りてケガ」

新聞とは G である。

注

- 1 ロシアの革命家、小説家、詩人(1879—1925)。
- 2 粛清は、きびしく取り締まって異分子などを除き、組織の純化を図ること。特に、独裁政党などで、反対者を追放・処刑などによって排除すること。ここでは粛清された作家たちのこと。
- 3 特に朝鮮半島中央部を横断している北緯38度をいう。朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国を分断する境界線。
- 4 朝鮮民主主義人民共和国の首都。
- 5 朝鮮民主主義人民共和国南西部の都市。
- 6 電車などの屋根に取り付け、架線から電流を取り入れる装置。

問一 二重傍線部 a～e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部①「こなれた」、②「タブーとされていた」、⑥「死線をくぐった」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① こなれた

- ア 原作を改めて、わかりやすくした
- イ 原作を消化して、熟達した
- ウ 原作以上に、よい趣を出した
- エ 原作に忠実で、誤訳のない
- オ 原作を日本人向きに改変した

② タブーとされていた

- ア 読むことを禁じられていた
- イ 特別視されていた
- ウ 話題に取り上げられなかった
- エ 法的に認められなかった
- オ 出版されることがなかった

⑥ 死線をくぐった

- ア 生きるか死ぬかの賭けをした
- イ 死の誘惑を脱した
- ウ 死にぞこなった
- エ 生死の境をさまよった
- オ 辛うじて生き残った

問三 問題文には次の文が省かれている。入るべき箇所の直後の文の文頭五文字を抜き出しなさい（句読点や記号を含む）。

〈末期の目〉に写った自然、または人間とは、どんなものだろう。

問四 空欄A～Fに入る最も適当なことばを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 抒情的
- イ 迅速
- ウ 体系的
- エ 貴重
- オ 建設的
- カ 極限的

問八 傍線部⑦「私は主観と客観の落差について常にペシミスティックな判断をくだすようになった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じ物事に対しても、自分がよいと思ったことを他人がよいと思うとは限らず、いつも他人がどう思うかを一番に考えるようになったということ。

イ 同じ物事に対しても、自分の評価は主観的なものであり、他人の客観的な評価とは違いがあるため、絶えず他人の評価が正しいと信じるようになったということ。

ウ 同じ物事に対しても、自分のもの見方と他人のもの見方には相違があるが、絶えず自分のもの見方は受け入れられないだろうと考えるようになったということ。

エ 同じ物事に対しても、自分だけいい気になっていても、他人はどんな事を言い出すかわからないので、いつも謙虚でいなければならないと思うようになったということ。

オ 同じ物事に対しても、自分と他人の判断や評価には大きな差があるので、絶えず他人の考えを参考にし、その差を埋めるようにしたこと。

問九 空欄Gに入る最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 気の利いた言い回しをするもの

イ 真実をねじまげるもの

ウ 世間へつらうもの

エ 洒落た表現をするもの

オ 意地の悪いもの

問十 本文の内容についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幻の名著の紹介、自己の読書法、死線をくぐった戦争体験、電車事故の体験など、とりとめもなく話題を提供していく中、最終的に「自分だけいい気になってはいけない」という教訓を導き出すものとなっている。

イ 現在の筆者の状況から語り始め、十五歳の筆者、二十代の筆者へと過去の自分の体験へとさかのぼって追想し、現在の自己が過去の自己によって構築されていることを改めて認識するものとなっている。

ウ 死地に赴いた状況の中で自然を見る〈末期の目〉と、それとは全く無関係に思われる「あわて者」とがタイトルで示され、最終的に両者が鮮やかに結びつく展開に、滑稽味や悲哀を感じるものとなっている。

エ 差し迫った状況の中で事物を見る〈末期の目〉を通して、筆者のいくつかの体験が語られるが、厳粛で恐ろしい体験もある中、軽妙な語り口も作用して、読後にはユーモラスな味わいが残るものとなっている。

オ 戦争体験者の危機回避能力が随所に示され、戦争を体験していない若者たちの危機回避能力の乏しさに警鐘を鳴らすとともに、危機回避能力の重要性を理解しないマスコミに対する批判を示すものとなっている。

(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

① スーパーでは、青果・肉・魚など商品の（ ）によって配置されている。

ア カテゴリー イ グループ ウ ジャンル エ タイプ

② 先生もあの舞台を（ ）のですか。

ア お見えになった イ 御覧になった ウ 御覧になられた エ 拝見した

③ 降って（ ）ような話を、すぐに信じるわけにはいかない。

ア 落ちた イ 飛んだ ウ 止んだ エ 湧いた

④ 私の判断だけで（ ）そんな大金は出せない。

ア おいそれと イ がらにもなく ウ これ見よがしに エ すんでのところで

⑤ 最初の約束は（ ）になって、結局何してもらえなかった。

ア ありきたり イ うやむや ウ なしくずし エ やみくも

⑥ 何にもしてないくせに、よく（ ）とそんなことが言えるわね！

ア くどくど イ こそこそ ウ ずばずば エ ぬけぬけ

⑦ あのいつも元気なコーチが風邪でお休み？（ ）とは、よく言ったもんだ。

ア 鬼のかく乱 イ カラスの行水 ウ 虎の威を借る狐 エ 河童の川流れ

⑧ 政治家の不用意な発言が（ ）を醸した。

ア 議論 イ 波紋 ウ 紛争 エ 物議

⑨ 男は（ ）をみはからって話を切り出した。

ア 足許 イ 片時 ウ 潮時 エ 引き際

⑩ 推薦した人物の人柄については、（ ）を押しします。

ア お墨付き イ 折り紙 ウ 太鼓判 エ 横車